



赤ちゃんの目のお話



こんにちは。院長の梅津由子です。

今年は暖冬との予想でしたが、それでも毎日の雪はきや雪道通勤でお疲れの方も多いのではないのでしょうか。インフルエンザも全国的に流行し始め、皆さん手洗い・うがいなどを励行し、暖かくして休んでくださいね。



今回は涙にまつわるお話を一つ。

「赤ちゃんは、泣くのが仕事。」そう言われるぐらい、生まれたての赤ちゃんはよく泣きますよね。赤ちゃんにしたら、意思表示の仕方がそれしかないのですから、無理もないことなのでしょう。

それにしても、泣いている赤ちゃんからは、あまり涙が出ません。ウソ泣きなののでしょうか？いえ、もちろんそんなことはありません。

実は、生まれた直後の赤ちゃんでも、もちろん目を守るための涙は出ているのです。ただ涙を作る機能が未熟で、涙として外に流れ出るほどは出ていないのです。

さらに、脳の発達もまだ十分ではありませんので、精神的な興奮や、情緒的な感情で涙を流すということもまだできません。泣いても涙が出ないからといって、心配する必要はないのですね。

逆に生後半年くらいまで、いつも涙がたまってウルウルしている赤ちゃんもいます。これは鼻び涙管るいかんという眼と鼻をつなぐ涙の排水管が完全に開通していないための症状です。多くは6か月くらいまでに開通しますが、目やにが多い、瞼が赤くなって炎症を起こしているような場合は治療が必要になります。

赤ちゃんと目の関係で言うと、もう一つ特徴的なことに「まばたきが少ない」という現象もあります。

赤ちゃんが、まばたきせず、愛らしい目でじっとこちらを見つめている…こういう経験をした人も少なくないでしょう。これは、赤ちゃんはまだ視力が弱く、目の焦点をあわせるのに時間がかかるためだそうです。

人は、目のピントがぼやけたとき、まばたきをして調整しなおすのですが、赤ちゃんはそれがすばやくできません。それで、まばたきせず、目を開いたままにしているのだそうです。

ちなみに、生後数ヶ月の乳児にはまばたきはなく、幼児で1分間に3～13回、小児で1分間に8～18回と、段階的にまばたきは増えていき、大人の男女は1分間に15～20回ぐらいの回数になります。

Valentine Day



目玉いきいきライフ

目玉いきいきライフのコーナーでは、
目の健康に関する情報や、
耳より情報（眼科だけどっ）をお届けします。



涙のおはなし

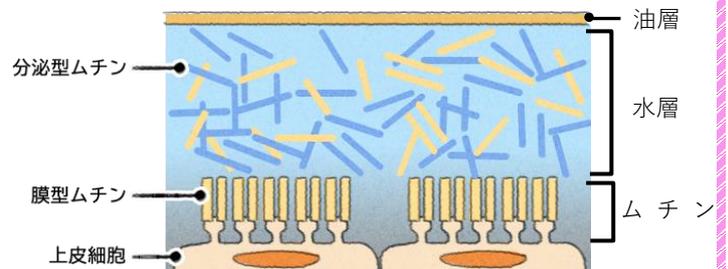
暖房を使うこの時期は、お肌も目も乾燥しがち。目の表面を潤す「涙」、じつはただの水分ではありません。今回は、涙の成分についてお話しします。

～涙はムチン層・水層・油層という3つの違う成分から成り立つ～

一番内側の層・・・ムチン層

ムチン層

涙の表面を膜状に覆う糖タンパク質で、角膜と直接接している層です。角結膜上皮細胞から発現している膜型ムチンは、角膜と涙を結び付け、目の表面に涙が均等に保てるよう涙の薄い膜を張っています。



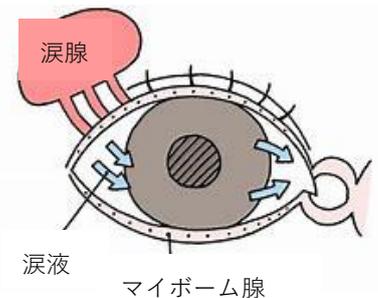
このムチン層がないと涙腺でいくら涙を生産してもどんどん流れてしまいます。

真ん中の層・・・ムチン+水層

水層

結膜にあるゴブレット細胞で生産される分泌型ムチンと、上まぶたの外部分にある主涙腺・まぶたの内側にある副涙腺で生産される水分が混合しながらゲル構造を形成しています。

目を乾燥から守り、潤いを保ち、外からのホコリや細菌・花粉などの侵入を防ぐ役割があります。角膜に必要な酸素や、アミノ酸・ブドウ糖などの栄養成分、リゾチームやラクトフェリンなどの感染予防に役立つ成分、細胞の生命維持やダメージ修復に必要なビタミンA、たんぱく質などを含んでいます。



一番外側の層・・・油層

油層

その名のとおり油の膜です。目の表面全体を覆い、フタをして涙の水分の蒸発を防いでいます。上下のまつ毛の生え際の内側にあるマイボーム腺から出て、まばたきをすることで目の表面全体に回り蒸発を防いだり、ホコリや細菌・花粉などから目を守ったりしています。

ムチン層・水層・油層のバランスが保たれることで涙は本来の働きを保つことができます。涙の層の厚みは約7μm。この薄い層にこんな働きがあったなんて、身体の機能ってすごいですね！

ハッピーバレンタイン♡
目玉いきいきライフ！



編集後記

米沢出身の絵本作家・亀岡亜希子さんのかわいい絵本がそろっています。大人も子供も楽しめますよ！ぜひ読んでみてください♪
ビビ・プッチ・まめちよ